
雨物語

長門 輝弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨物語

【Nコード】

N9079L

【作者名】

長門 輝弥

【あらすじ】

雨の日、駅近くの橋の下、出会う謎の女子高生。僕は親の迎えを待っている。彼女は何を待っている？2年も同じ場所に立っていないが、お互いのことを何も知らない2人。しかしある雨の日、バイクに轢かれそうになった彼女を救ったのをきっかけに、2人は雨の日だけ、話をするようになった。

プロローグ

雨、という言葉にどんなイメージがあるだろうか？

今、僕は雨が降る中傘を差しながら立っている。

薄暗い夕方、雷を伴う激しい雨だ。

傘に支援されないはみ出た通学用靴はびしょ濡れで、中身が心配である。

橋の下のトンネルを抜けたところに僕以外にもう一人。

髪の毛の長い、黒いセーラー服を着た少女だ。

同じ様に傘を差し何かを、誰かを待っているようである。

なぜ僕が今ここにいるのか？

大した理由はない。

僕は学校へは電車に乗っていくのだが、雨の日には親に駅まで車で送って行ってもらっている。

晴れの日も自転車ですべて行く。

だから今は親の迎えを待っているというわけだ。

さて、実は今までにも何度かこの少女と共にこの場所で突っ立っていた事は何度もある。

それは決まって雨の日で、きっとこの少女も親の迎えを待っているのだらうとずっと思っていた。

しかし、迎えが来るのはいつも僕の親が先なのである。

初めて彼女を見かけたのは高校に入ってからすぐのことで、高校生になって初の雨の日の事だ。

と言うことは、今僕は高3になったばっかなので2年前の事で以外に長かったりする。

だから正直に行ってしまったえば、気味悪さを感じている。

お互い傘を差しているので僕は彼女の顔をあまり見たことがないし、喋ったことも無い。

高1の時に会って、高3になった今でも制服を着ているということは同じ年か？、それか留年でもしたのだろうか？

顔を見ようと試みたこともあったが、運よく見えたかと思ったら、長い前髪で顔は隠れていた。
ぞっとする。

そう、僕にとって雨のイメージとは、彼女だった。

雨と言う単語を聞けば彼女のことを思い浮かべる。

そして、今日も彼女と会うことになるのかと、若干鬱になる。

しかし、それが嫌なら迎えに来てもらう場所を変えればいいという意見は不思議と僕には思い浮かばなかった。

なぜだろう？

親に彼女の事は言っていないし、特に親が彼女について話題を振ってくることも無い。

迎えに来ている以上、親は彼女の姿を見ているはずだ。

だから僕は、もしかして彼女は幽霊なんじゃないかと思っている。

オカルトに関しては信じてはいないが、興味はある。

実際目の前の、この少女が本当に幽霊だったら？

この物語は僕がこの少女に話しかけたことから始まった。

とある雷雨の日

季節は春を終え、夏に向かう。

梅雨入りの時期である。

僕は電車に揺られながら、降りる駅へと向かっている。

その最中、携帯電話のネットサービスを使い某オカルト板を閲覧していた。

いくつもあるスレの中から探し求めているタイトルを探す。

外は激しい土砂降りで、雷も鳴っている。

電車の中は雨で濡れた人や、濡れっぱなしの傘やらで床は水びたしで、空気は湿っている。

今日も彼女に会うことになるだろう。

しばらく探していると、あった、スレが。

”いつも同じところに同じ女がいるんだけど…”

読んでみればこのスレを立てた奴は、夜に近くの公園に行くが決まってブランコで女性が遊んでいて、それがたまたまなく不気味なのだという。

しかもそれを友人に話してみたら、友人が同じ時刻に公園に行ってみたらしく、友人曰く「誰もいない」らしい。

だから今友人と一緒にその公園へ行くんだ！と計画を立てている最中のようなのだ。

この書き込みに対し、匿名希望さんたちはいろいろな意見を交わしている。

幽霊だとか、家出してる女の子だとか、お前の幻覚だとか、釣りだとか。

マジレスしているのだろうか、その公園で昔自殺した女だ、なんて書き込んでいる奴さえいる。

基本的に霊的な物は僕は信じていない。

これだけ幽霊と言う言葉が有名なら、今までの人生で幽霊と出会っても不思議ではないはずである。

なのに今までに出会ったことは一度もないし、身近な人が見たって話も聞かない。

だけど興味はある、怖いけど。

科学で説明できないモノは信じない。

そう言ったって、もし幽霊を見たらきつと怖くて腰を抜かすだろう。

ただの強がり、または自分がいかにも頭が良いだろうと自慢しているようにしか思えない。

やっぱり彼女も幽霊なのだろうか？

僕がそう思い始めたのは最近の事ではない。
不気味に思い始めたのは結構最初の方だったと思う。

彼女に迎えが来ているところを見たことなんてないし、髪の毛は長く顔は隠れて見えないし、殆ど動かないし、…雨降ってるし、黒いし…。

カチカチと下ボタンを押して掲示板を読み進めていく。

その場所で事故にあって死んで、その場所から動かない地縛霊という意見が書き込まれている。

（地縛霊…か。）

オカルト板を見て時間を潰していたらいつの間にか次の駅で僕が降りる駅だった。
時間って流れるの早いね。

携帯をズボンのポケットに仕舞、停車を待った。

電車を降りて改札を通り抜ける。

ローカル線なので、降りる人は少ない。

古汚い駅を傘を差して出る。

駅を出るとまず地下通路が左側にあるので、階段を下って地下へと行く。

地下の上は大きな交差点になっている。
滴る水が通路の脇に薄汚く貯まっている。
足音が壁に反射して響き渡る。

地上へと戻る階段を上がり、その正面にさらに橋があるので橋の下に出来たトンネルを潜り抜ける。

トンネルをくぐると右手に細い道があって前方の道と挟んだ部分に駐車場がある。

僕は雨の日になるとこの駐車場で親の迎えを待っているのだ。

そして

例の女がいる。

（やっぱ今日もいるんだな…。）

黒い傘を差し、黒い長髪を持ち、黒いセーラー服を着て、黒いソックスを穿いて、黒いローファーを履いている、この全身真っ黒女である。

年中この格好である。

これはもう明らかに奇妙である。

衣替えはないのだろうか？

この時期にはもう衣替えし終えているはずなのに。

僕の通っている学校の女子の制服もセーラー服なのだが、夏服は黒ではなく、白だ。

しかも長袖ではなく、半袖だ。

ただ、彼女の足と腕だけは綺麗な肌色だ。

この部分だけが彼女が人間であるという事をかろうじて保っている。これが真っ白い肌だったら間違いなく僕は幽霊と決めつけていただろう。

彼女は駐車場の中では待たず、駐車場入口付近にある電信柱に身を寄せて立っている。

これまた不気味なのである。

これまでに何度も出会って、何度か顔を見ようとしたり、話しかけたりしようと試みたが全て失敗に終わった。

前者は傘と前髪のせいで、後者は僕に勇気がないだけだった。

親が来るまでだいたい十分くらい。

携帯で家に電話し、迎えを頼んだ。

雷と雨と女と黒と電信柱。

ぞっとせずにはいられない。

彼女の待つものが来るまで僕も待ってみようかと試した日もあった。しかし、20分待てど、30分待てど、1時間待てど、彼女は動かないし、迎えもこない。

最終的には僕が折れて先に返ってしまった。

彼女は僕の存在に気づいているのかすら疑問に思ったときでもあった。

普通に一般女性にこんなことやったら、怪しまれること間違いなし。そして振り返って見たりしても、おかしい行動ではないはずだ。

彼女は決まって俯いている。

本当に、なんなんだ、彼女は。

彼女に対していろいろ考えたりしていると、トンネル前方の道からバイクが走ってきた。

そこそこうるさい音を立てながらこの細い道をなかなかのスピードで走っている。

初めは特に気にも留めていなかったが…。

バイクの直線状に彼女がいることに気がついた。

そう、バイクはなぜか道の脇を走っていたのである。

まずい、このままじゃ彼女にぶつかる。

彼女が立っている位置は、バイクの運転手からみれば、左にある電信柱の右側…。

なんでこんなところを…!!!

僕は思わず彼女の元へと走り寄った。

この行動はもはや反射と言ってもいい。

僕の直感が働きかけたのかもしれない。

傘と鞆を投げ捨て全力で彼女の元へと向かう。

水がはじける音とバイクの轟音を聞きながら。

「危ない!!!」

僕は彼女の二の腕を引いた。

するとトンネルから別のバイクが走ってきた。

あ、そうか、正面衝突を避けるためにバイクは道の脇を…。

「馬鹿野郎！！危ねえじゃねえか！！」

叫んだのは僕ではない。

叫んだのはトンネル前方から来たバイクの運転手だった。

「はっ！？…あぶねーのはそっちだろ、バカ…」

語尾が小さくなったのは僕の臆病さが原因である。

妙な興奮を感じながら、自分が1人の女性の二の腕を掴んだままだという事に気がついて手を離れた。

彼女は僕に強く腕を引かれた衝撃で握っていた傘を落とし、地面にしゃがみ込んでいた。

轟音が遠くに離れていく。

助けたは良い物の、何この気まずい状況。

彼女は俯いたまま喋らないし。

とりあえず、これは話すきっかけだと思って僕は話しかけてみた。
さっき彼女を助けた勇氣よ！再び！…祈った。

「大丈夫…っすか？」

言った後に生唾をぐくりと鳴らして飲み込む。

橋の上で行き交う車の走行音が嫌に響く気がした。

雷はゴロゴロと音を立て、雨はザーザーと容赦なく振り続ける。

彼女は喋らなかった。

やっぱり怖い。

「すみません、余計なお世話…だったですか？あの、本当にすみません…。」

自分に非があるはずがない！交通事故に会おうとしてる人を救ったんだ、僕は。

転がる彼女の黒い傘を見つけた。

「あの…傘、とってきますね…。」

傘を取ってくることを口実にいったんこの場から離れた。

傘を拾った位置から彼女を見ると、地面に座り続けたまま、雨に打たれている。

口元が見えた。

艶めかしい唇を見た。

傘を拾って彼女の元へ帰り、傘を渡した。

「あの、傘拾ってきましたけど…。」

すると彼女はゆっくり垂れた頭を僕の顔を見るために静かに上げた。雨で濡れた髪の毛、視界を作るために顔にかかる髪の毛を手で左に分ける。

それは僕が彼女の顔を見た瞬間だった。

今までいろんな顔を予想してみた。

クラスで一番の美人を想像してみたり、好きな芸能人の顔を想像してみたり、結構普通の顔なのかもと、思い浮かべてみたりした。

しかし顔と言うものは、見たことのない顔以外はなかなか自分では想像することはできない。

顔を見ようと試みたが、前髪で見えなかった。

しかしそれが今、彼女の手によって開かれたのだ。

僕の目の前で雨に打たれていた女性

は、とてもつもなく美少女だった。

もしこれが人間の想像によって創られた妖怪の様な顔だったら、一目散に逃げ出して、次から雨が降った時には、迎えに来てもらう場所を変えてもらおうと布団にくるまりながら恐怖でガタガタしてたところだろう。

そして、この場所を心霊スポットとして心霊番組に投稿していただろう。

しかし目の前にいる彼女はそんなこの世の者とは思えない顔ではなく、どう考えてもこの世の顔だよな、という顔をしていた。

この世の中でも美女と呼ばれる類だ。

あまりにも驚きな事実を目の当たりにされて、僕は固まってしまった。

傘を差しだしたまま、あほみたいに開いた口からはよだれが垂れそうだった。

彼女は僕と目を合わせてからすっと目を反らし、僕から傘を受け取った。

しかし相変わらずの無口っぷりである。

感謝の言葉でもその口から出したらどうだ。

と、思っていたら

「ありがとう。」

と細く繊細な糸で出来たような声で僕に対して感謝の意を表した。

傘を受け取った彼女は立ちあがり、定位置へと戻って行った。

彼女の感謝を聞いて少しほっとした僕は彼女に再び話しかけてみた。

「あのさ…、君ってけっこう前からここにいるよね？」

話しかけると彼女は振り向いてきた。

何を考えているか分からない無表情で、瞬きを数回。

「そうね。あなたもけっこう前からここにいるよね。」

そう言って彼女は向きを正した。

その背中からは、もう話してくるなというオーラが漂っているかのように見えた。

「俺は高1の時からだけ…。」

と、僕の親が迎えにやってきた。

「あ、俺迎え来たから…じゃあ…。」

そう言って少し名残り惜しさを残して僕は車に乗り込んだ。

家に帰ってから僕は考えた。

彼女には触れることができた、顔を見ることができた、会話もできた。

彼女は幽霊なんかではない。

幽霊がこんなに人間の様な姿なわけではない。

自室のベッドにあおむけに横たわりながら視線を窓の外へと移す。

止まない雨の音。

月が雲に覆われ、闇に満ちた空。

晩御飯の時、母が放ったその一言が僕を凍りつかせた。

「あんた、誰と話してたの？」

とある雷雨の日（後書き）

一話を読んでいただき、本当にありがとうございます！
まだまだ小説を書くことに关しては素人同然な自分ですが（当たり前前だけど）、ぜひ感想などあれば教えてください！

この手を引いて

次の僕が彼女に会ったのは三日後のことだった。

この日もいつものように駅から例の駐車場へと向かう。

今日の雨はしとしとと優しく、か細い線を降らせていた。

パラパラと傘に落ちる雨粒の音を聞きながら、また僕は彼女を見つけた。

相変わらずの全身黒ずくめである。

三日目前、初めて話した。

と言っても数回言葉を交わしただけで、おしゃべりと呼ぶには遠い。

もし彼女がまたいたら（というかいると言いきれた）話しかけてみようと思い、僕はまだ家に電話をしていない。

電話をすれば、制限時間が出来上がってしまうからだ。

視線を彼女に向けてしばらく見てみる。

いきなり振り返ってきたらどうしようかと少しドキドキした。

見続けていたら、気がついたことがある。

それは、彼女が定位置から僅かではあるが移動したのだ。

よろけるように後ろに下がった。

今まで彼女が自らの足で移動しているところなんていうものを見たことがなかったので、これは新たな発見である。

ついでに、顔も動かす事が出来るようになったのか周りを見渡し始めた。

右を見たり、左を見たり、上を向いたり…。

彼女は僅かながら、動いている。

そんな彼女を観察しながら、僕は三日前に母に言われたことを思い出す。

母は、僕が何もない空間に向かって何か話している姿を見たというのだ。

あたりはそんなに暗くなく、見間違いなんてことはあるはずがない。

母には彼女が見えていなかった。

僕には見ることができれば、触れることもできるし、会話もできる。

やはり、彼女は幽霊なのだろうか？

それにしてもくっきりしすぎている。

母と僕の見たものの食い違い。

意を決して、僕は少しずつ彼女との距離を狭めながら「あのー。」と話しかけてみた。

一応、母の意見も参考に周りには誰もいない状況で、だ。

なかなか勇気のいる行動である。

見知らぬ人に話しかけることに抵抗は、ある。

しかし出来ないというわけでもない。

問題なのは、彼女が美人だということだ。

僕は普段から美人な人とは会話しない。

付き合い経験だっていないので、自分とは住む世界が違う人とは話したことがほとんどない。

正直に言ってしまうと、僕はそんなに顔は良くない…。

顔に自信がなければ、躊躇われるものなのである。

多分、今の僕は上手く舌が回らず、変な声で呼びかけてしまっただろう。

改めて話をする考えると、頭が真っ白になってしまう。

何も計画無しに話しかけたわけではないが、やはり上がってしまう。

熱くなった僕の顔を冷えた空気が冷やしてくれた。

彼女がこちらを振り向く。

無表情な美人は「？」を頭に出しながら首をかしげ、じっと僕を見つめてくる。

直視できない僕は目を反らし、言葉を続けた。

「この前…怪我とか無かった？」

数秒沈黙が流れ、彼女は一つ溜息をついて

「別に。ない。」

と短く言って、まだ何か？と言った様な顔で僕を見てくる。

「えーと、なんて言うかさ…、俺達よく合うよね？」

苦笑いしながら会話をつづけてみる。

真相を暴くにはいつのことになるのだろう。

「なに？ナンパ？生憎だけど、私には心に決めた人がいるから、ごめんね。」

振られた、そんな気一切ないのに。

反射的に「はあ!？」と大きな声を出してしまった。

でも案外、突っ込みを入れることができたので、これは会話をつなぐチャンスである。

「ナンパじゃあねえよ…。」

「じゃあ何?」

「お前も親の迎えかなんか待ってんのかと思ったただけなんだけど。」

彼女の視線が僕から外れた。

そして体の向きを変えた。

動揺している。

「ああ…えっと、まあこれは俺が単純に気になってただけってのはなしだからさ…。だってかなり前から俺はお前の事見たことあるけど、俺より先にここからいなくなるってことがなかったし…。」

「…彼氏よ。」

まあ、驚きもしないが。

「心に決めた人?」

「うん。だから早くどっか行って、このストーカー。」

「ストーカーじゃねえよ！俺もここで迎えを待ってるってさっき言
つたろ！？」

「なによ、いつだか私の1時間も見張ってたくせに。」

まさか、気づいていたのか。

「えっと…それは…。」

「なに？言い訳できるの？できるならしてみれば？」

「ぐっ…。」

ああ、話しかけたのが運のつきだったか。

あんな前の話を…。

彼女はふんつと鼻を鳴らして僕を睨んでくる。

僕は焦って、動揺している。

イタズラがばれて、先生に怒られてる気分だ。

と、彼女が口を開いた。

「あのね、あなたが三日前に私の手を引いてこの場所から引っ張って欲してから私は少し動けるようになったの。」

ん？なんだそれは？

僕はその言葉を聞いて冷静になれた。

彼女は定位置から半径1メートル程をクルリと円を書くように歩いた。

「今私が歩いた範囲は動けるようになった。」

「はあ…。」

「あなたは気づいているでしょうけど、」

「お前が幽霊だってことか？」

「そう。」

僕は幽霊が見えるのか。

はは、今まで聞いたことしかない幽霊を僕は目の当たりにしている。
足もちゃんと生えている。

幽霊の中にはこんな美人もいるのか。

だが、予想通りでもある。

衝撃の告白だが、それは僕の中である程度断定していた事柄だった。

「だから私も実はあなたに話しかけたかった。」

「は？それがお前が幽霊であることとなんか関係あるのか？」

「私は地縛霊、自分の力では移動することができない。」

「…。」

「あなたが私の手を取って私を連れまわすことによって、私の移動範囲はそれだけ増える。」

「連れまわすってなんだよ…。」

「私が若干動けるようになったのはあなたが3日前に私の腕を引っ

張り、無理矢理移動させたから。」

「なるほど。それで？」

「私はここでずっと彼氏を待ってた。でも彼氏はずっと来ない。私が死んだ日からずっとここで待ってるのに。」

そう言うとき彼女は俯いてしまった。

駐車場と道を遮る低い塀の傍に小さな花が供えられていた。

なぜ今まで気がつかなかったのだろう。

花の他に小さな石碑(?)も立っている。

石には「城野 文」と彫られている。

かがんでそれを眺めた。

名前は城野文。

「よかったら良いんだけど、なんで死んだんだ？」

少なくとも最近のニュースではないはずだ。

人が1人死んだんだ、そのニュースがここ周辺に住んでいる僕の耳に入らないわけがない。

「ずっと前、20年も昔になるのかな、通り魔、包丁でここを刺されたの。」

そういつて彼女は自分の腹に手を添えた。

「雨の日、彼氏と待ち合わせでここで待ってたらね。」

悲しそうに灰色の空を仰ぐ。

雨が彼女の顔を濡らし、まるで泣いているかのように顔面に溜まった雨は頬を伝って落ちてきた。

「だから雨の日にしか私は現れることはできない。」

目の前の幽霊は喋る喋る。

人が歩いてきたので、僕は彼女を無視するように話を聞いた。

「…ちょっと聞ってる？」

彼女がジト目で僕を見てきた。

歩行者が後ろ姿になってから僕は「聞してるよ。」と小さく言った。

「でも、お前の彼氏、そんな長く待ってるのに一度も来ないのか？」

僕は彼女の彼氏に怒りを感じていた。

「うん、一度も。」

「酷い彼氏だな。」

20年も、死んでもなお、霊となって一途に待ち続ける彼女。
20年も前のことなんだ、忘れろよ、という思い。

彼氏に対して、お前はなんてひどい奴なんだという怒り。

彼女の彼氏が同い年だとしたら今は30代後半だろうか。

「だから私が見えるあなたに頼みがある。」

「え?」

「私をここから連れ出して。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9079/>

雨物語

2010年10月14日13時07分発行